平成２４年度

第１回 富山高等専門学校 運営諮問会議

会　　議　　録

平成２４年７月１８日（水）

平成２４年度 第１回 富山高等専門学校 運営諮問会議

日　時：平成２４年７月１８日（水）午前１０時

会　場：富山高等専門学校本郷キャンパス大会議室

【会議次第】

１．開会挨拶

２．出席者紹介

３．議　　事

（１）富山高等専門学校年度計画について

「平成23年度 年度計画実施状況・平成24年度 年度計画」

（２）その他

４．閉会挨拶

【出席委員】　〔敬称略、順序不同〕

遠　藤　俊　郎（富山大学長）

石　塚　　勝（富山県立大学工学部長）

木　下　　晶（富山県教育委員会県立学校課長）

高　田　　勇（富山県中学校長会会長）

松　坂　武　彦（前社団法人全日本船舶職員協会副会長、
株式会社ケイセブン専務取締役）

金　岡　純　二（公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長）

正　橋　哲　治（立山科学グループ管理部人材開発グループグループ
マネージャー）

【欠席委員】

松　田　　登（富山高等専門学校技術振興会会長）

黒　田　輝　夫（富山県中小企業団体中央会会長）

犬　島　伸一郎（富山商工会議所会頭）

梅　田　ひろ美（株式会社ユニゾーン代表取締役社長）

山　口　光　三（富山商船同窓会長）

【富山高等専門学校出席者】

米　田　政　明（校長）

丁　子　哲　治（副校長）

成　瀬　喜　則（副校長）

本　江　哲　行（教務主事）（本郷）

遠　藤　　真（教務主事）（射水）

川　淵　浩　之（学生主事）（本郷）

水　谷　淳之介（学生主事）（射水）

高　熊　哲　也（寮務主事）（本郷）

水　本　　巌（寮務主事）（射水）

林　　興　一（事務部長）

杉　森　伸　平（嘱託）

広　瀬　浩　一（総務課長）

中　島　鉄　行（管理課長）

松　梨　英　輔（学務課長）

伊　藤　幹　雄（学生課長）

藏　川　一　正（総務課課長補佐）

錦　織　　掌（総務課主査）

清　水　由美子（総務課主査）

〔開会　午前１０時０２分〕

１．開会挨拶

【林事務部長】　本日は、お暑い中、そして皆様ご多忙の中、富山高専にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

ただいまから、平成24年度第１回富山高等専門学校運営諮問会議を開催いたします。

議事に入るまでの間、進行を務めさせていただきます富山高専事務部長の林です。どうぞよろしくお願いいたします。

開会に当たりまして、本校の米田校長からご挨拶を申し上げます。

【米田校長】　おはようございます。校長の米田です。よろしくお願いします。

今ほど部長からもありましたが、今日は富山高専の運営諮問会議、毎年１回以上開催することになっておりまして、平成24年度の第１回であります。委員の皆様には、大変お忙しい中、またこの暑さの中をご参集いただきまして、本当にありがとうございます。

ご案内のように、富山高専が独立行政法人化したのが平成16年度で、独法の中期目標、中期計画期間は５年間です。第１期が平成16年度から20年度までで、今第２期、平成21年度からの５年の４年目になったところです。

先ほど控え室でお話を伺っていたときに、このような会議は毎年やらねばならないのかというご質問もありました。５年間の中期計画は、主務大臣である文部科学大臣から目標を指示されまして、それを実現、達成するため、各年度に実施する事業何をやるのかという年度計画を立てています。そのこともありまして、毎年本校におきましても実施事業等について委員の皆様のご意見をたまわりこのような運営諮問会議を開催させていただいているということです。

今日は、昨年度、平成23年度の年度計画の実施状況と、今年度、24年度の年度計画はこのような事業の実施を考えていますということをご説明する予定にしています。

委員の皆様には、それに対してアドバイスや忌憚のないご意見をいただいて、本校のＰＤＣＡとして、評価していただいたものをベースにして改善していくことで、役立てたいと考えています。

余談を１つ申し上げますと、国家戦略会議の中で、今、大学全入時代を迎えて、大学改革が急務であるという話が出ていると。そこでの意見として、高専は産業界で即戦力とい

いますか役立つ実践的な技術を身につけてしっかりやっているという話が出ていると聞いています。

若干高専を高く評価していただいているわけですけれども、今、高専制度ができてちょうど50年になります。産業界を中心に評価をしていただいているとはいっても、それにあぐらをかいてはもちろんいけないわけで、次の50年に向かってどのような改革が必要なのかをしっかりと踏まえた上で、意識した上で本校の運営に取り組んでまいりたいと考えていますので、それも共有していただきながらご意見を賜りたいと思います。

本日は、短い時間ではありますが、どうぞよろしくお願いいたします。

２．出席者紹介

【林事務部長】　本日ご出席いただいています委員の皆様をご紹介させていただきます。

富山大学長　遠藤俊郎様。

富山県立大学工学部長　石塚　勝様。

富山県教育委員会県立学校課長　木下　晶様。

富山県中学校長会会長　高田　勇様。

社団法人全日本船舶職員協会副会長　松坂武彦様。

立山科学グループ管理部人材開発グループグループマネージャー　正橋哲治様。

公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長　金岡純二様におかれましては、ご出席の予定ですが、少し遅れると連絡が入っていますので、よろしくお願いいたします。

なお、本日、富山高等専門学校技術振興会会長　松田　登様、富山県中小企業団体中央会会長　黒田輝夫様、富山商工会議所会頭　犬島伸一郎様、株式会社ユニゾーン代表取締役社長　梅田ひろ美様、富山商船同窓会長　山口光三様におかれましては、ご都合によりご欠席でございます。

続きまして、同席いたしています本校の関係者を紹介させていただきます。

校長の米田です。

副校長の丁子教授です。

同じく副校長の成瀬教授です。

教務主事（本郷キャンパス）の本江教授です。

（金岡委員　入室）

【林事務部長】　今、出席者の紹介をさせていただいておりました。

改めてご紹介させていただきます。

公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長　金岡純二様です。

引き続き、本校の出席者を紹介させていただきます。

教務主事（射水キャンパス）の遠藤教授です。

学生主事（本郷キャンパス）の川淵教授です。

同じく学生主事（射水キャンパス）の水谷教授です。

寮務主事（本郷キャンパス）の高熊教授です。

同じく寮務主事（射水キャンパス）の水本教授です。

嘱託の杉森です。

総務課長の広瀬です。

管理課長の中島です。

学務課長の松梨です。

学生課長の伊藤です。

このほか、総務課の職員が同席しています。よろしくお願いいたします。

引き続きまして、席上に配付しています資料を確認させていただきます。

（資料確認――記事省略）

【林事務部長】　本日の会議は12時頃までの予定にしています。その後、皆様方には同じフロアの別室で昼食をとりながら懇談していただき、13時に終了の予定です。

本日の議長については、昨年度の本会議で議長に選出していただいています遠藤富山大学長にお願いしたいと思います。

それでは、遠藤学長、よろしくお願いします。

（遠藤議長　議長席へ移動）

【遠藤議長】　こんにちは。富山大学の遠藤です。ご指名により、議長を務めさせていただきます。よろしくお願いします。

本日は忌憚のない意見を交わしていただいて、高専の将来に役立つような時間を過ごせればと思います。

３．議　　事

（１）富山高等専門学校年度計画について

「平成23年度 年度計画実施状況・平成24年度 年度計画」

【遠藤議長】　早速議事に入らせていただきます。

本日の議題であります富山高等専門学校の年度計画について「平成23年度 計画の実施状況・平成24年度 年度計画」については、事項ごとに、最初、23年度の計画状況を報告、説明していただいた後、24年度の計画をご説明いただくという形で、概要、各パートと続けてご説明いただいて、その後議論させていただければと存じます。

最初に、米田先生から概要の説明をお願いします。

【米田校長】　資料のボリュームが多くて恐縮ですが、Ａ３横長の資料１をご覧いただきたいと思います。

本校の第２期中期計画が左の１列、その次の列が、先ほども挨拶の中で申し上げましたが、中期計画５年分を年度ごとに計画を立てていまして、その昨年度分、23年度年度計画です。真ん中が、細かな字で恐縮ですけれども、その年度計画の実施状況、実施した取り組み等を書いています。年度計画を実施するに当たって、いろんな数値データが出てまいります。それが第４列で平成23年度年度計画実施状況資料、これは別資料になっています。その資料をご覧いただくと、そのような記述の裏づけとなるデータが記載されています。一番右側の列が今年度、平成24年度の年度計画で、このような事業を計画していますということが書いてあります。

大きな表の５つの列のご説明は以上です。

内容ですが、これは本校独自のものではなくて、現在、51国立高専がありまして、国立高専機構という本部のもとで運営しています。51国立高専共通した高専機構の第２期中期計画に基づくものです。

最初に書いてあるのが、12ページものの１枚目の左上、「Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置」と長い表題がついていますが、１　教育に関する事項が６項あります。「（１）入学者の確保」、2/12ページの１行目の「（２）教育課程の編成等」、3/12ページの上から２行目に、「（３）優れた教育の確保」、これも重要な課題です。4/12ページの中ほどに、「（４）教育の質の向上及び改善のためのシステム」、6/12ページに「（５）学生支援・生活支援等」、7/12ページの一番下の行に、「（６）教育環境の整備・活用」、ここまでが１　教育に関する事項です。

その次は、8/12ページの一番下の行に「２　研究に関する事項」が、さらに9/12ページ

の中ほどに「３　社会との連携，国際交流等に関する事項」、10/12ページの一番下の行に、「４　管理運営に関する事項」、12/12ページの一番上の行に、「５　その他」の事項があります。

それから、「Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するために取るべき措置」、「Ⅲ予算（人件費の見積もり等を含む，収支計画及び資金計画）」の事項があります。

このような資料の作りになっていまして、今、遠藤先生がお話しされましたように、項目ごとに順次説明をさせていただきたいと思います。

以上です。

【遠藤議長】　分かりました。

教育、研究、社会連携・国際交流、管理運営と、大きく４つのパートに分かれていますが、最初に教育からご説明をいただきたいと存じます。

教育に関しては、まず６項目やっていただいて、その後質疑とさせていただきたいと存じます。

説明をいただく前に、もう１度、中期計画は何年から何年までで、今は何年目になるのか確認したいと存じます。

【米田校長】　今は、第２期の中期計画期間（平成21年度から５年間）の４年目に入ったところです。

【遠藤議長】　４年目ということは、もう仕上げですね。

【米田校長】　そうですね。

【遠藤議長】　５年で終わりですね。

【米田校長】　５年です。その次、第３期があると思います。

【遠藤議長】　もちろん第３期に続くのですけれども、中期計画としては23年度が折り返しで、現在があと１年余を残してということですね。

【米田校長】　はい。

【遠藤議長】　分かりました。

それでは、「（１）入学者の確保」からご説明をお願いいたします。

【米田校長】　それでは私からご説明します。

逐一読み上げ説明では時間がかかり過ぎますので、かいつまんで話をさせていただきたいと思います。

入学者の確保については、高等教育機関、学校として最重要課題の一つととらえていま

す。参考資料に高専機構の第２期中期計画の中で、数値目標はあまりないのですが、51国立高専全体で志願者の数を１万8,500人以上とするという数値目標を掲げています。これは第１期の目標として掲げたのですが、全体としては達成できていません。検討経過の中では、第２期での達成も難しいことから中期計画に数値目標を盛り込まないことの話があったのですけれども、文部科学省から、「１期で達成できないからといって２期に下げるのはまかりならん。引き続き１万8,500人を目標に計画しなさい」という指導があったということでは、１万8,500人というのは、なかなか大変な数字になります。これは、中学校を卒業する生徒の数の約２％が高専を志願するという目標を掲げています。

それに対して本校は、志願者対策は大変重要だという認識のもとに、志願者対策室と、広報が特に重要だということで広報戦略室の２つの室を設けて広報・志願者対策に当たっています。

両者を一緒にして広報・志願者対策本部という本部構想を立てて、さまざまな対策、戦略を展開しています。中学校訪問を２回以上実施すること、オープンキャンパスにできるだけたくさんの中学生に来ていただくこと、資料にありますように、さまざまな広報紙を作って必要に応じて配布すること、Ｗｅｂサイトを充実するということなどを行っています。

その中で特に強調したいことは学力入試の方法です。２年半前に旧工業高専と商船高専が統合した富山高専ですが、昨年度までの学力入試は旧商船が併願制であり、中学生にとって選択肢の幅が広がる県立高校との掛け持ち受験ができました。それに対して旧工業高専は専願制であり、キャンパスで異なっていました。平成24年度の入試から併願制に統一しました。その結果、853人ものたくさんの学生が志願してくれまして、これは資料の中に出ている数字ですが、富山県の中学校卒業生の約８％強が高専を受けてくれたという数字になっています。大変高い数字で、平均２％弱のところを富山県の８％ぐらいの中学卒業生が志願したことになっています。それでも高専全体としては１万8,500人に届かず、１万8,000人を超えた数値になっています。本校は１万8,000人超えに対して大変貢献をしたと考えています。

今後も、女子学生を増加するという戦略が機構本部にありまして、本校も女子学生が多い学校ではありますが、さらにこれを増やすための努力をすることが計画に掲げてあります。

新しい高専としての広報用の動画コンテンツも少し予算をかけて充実させようという

ことで、今年度からその作成に取り組んでいるところです。

長くなりましたけれども、以上、ポイントだけ説明をさせていただきました。

【遠藤議長】　ありがとうございました。

それでは、「（２）教育課程の編成等」について成瀬先生からよろしくお願いします。

【成瀬副校長】　2/12ページの「教育課程の編成等」です。

項目が幾つかありますが、②は、まず本科におきまして、中期目標としてはカリキュラムをきちんと確実に実施するということがあります。専攻科におきましても、何年かに一度、ＪＡＢＥＥの認証もあります。ここでカリキュラムの確実な実施ということで、昨年度、専攻科はＪＡＢＥＥの中間審査を受けています。

今年度については、まず本科の方は、今、高専機構がモデルコアカリキュラムというものを策定しようとしています。イメージ的には、ミニマムエッセンスを出してそれを着実にやりましょうということですが、今年度はそれを本校として検討して対応していこうと考えています。

それから、例年行っていますが、専攻科生については学位の取得の対策をしっかりと対応していこうということです。大学と若干違いまして、学位審査は、学位授与機構の試験を受けて合格したときに学士がもらえることになりますので、そういうところを踏まえて指導教員、専攻科生に十分指導していきたいと思っています。

③ですが、教育課程の中でも基幹的な科目である数学、物理、英語について教育改善に資することを目的に毎年学習到達試験が高専機構全体で統一して行われていますが、今年もそれをしっかりと対応していこうと思っています。

それ以外に、最近はＴＯＥＩＣの対策が重要視されていますので、後援会の支援を得ながら、ＴＯＥＩＣ受検対策を今企画して実施しています。特に授業の対応はもちろんですが、課外活動でもＴＯＥＩＣ対策の指導を今年度から取り入れました。

④ですが、学生による授業評価アンケート、教員相互のピアーレビュー、授業参観を今年も年２回実施しており、その結果についてはＦＤ委員会、教務委員会等で議論しています。

最後に、全国高専体育大会、ロボットコンテスト（ロボコン）、英語プレゼンコンテスト（英語プレゼン）、プログラミングコンテスト（プロコン）など高専独自の大会がありますが、今年度もこれらを中心にして学生の課外活動を支援していきたいと思っています。

以上です。

【遠藤議長】　ありがとうございました。

引き続き、「（３）優れた教員の確保」について米田先生からお願いします。

【米田校長】　これも私からかいつまんで説明をさせていただきます。

学校にとって特に教員の資質は重要なファクターになります。優れた教員の確保に対しては、まず最初に原則公募制で教員の採用を行っています。

資格についても、年度計画にも記載があります。専門学科と専攻科専任教員の採用に当たっては、博士の学位を必須にしています。着任時に取得見込みの場合は、万一その見込みが外れたときは内定を取り消しさせていただく措置もとっています。

一般教養科の教員に関しては、修士の学位を必須にしています。また、博士あるいは修士と同等の資格も考えています。いずれにしましても、そのような資格を取得している人を採用するという方針を持っています。

多様な経験を持つ教員組織が実践的な技術を教示する本校の教員には必要だということで、できるだけ海外での経験あるいは企業での経験のある方を採用するという方針を立てています。

本校には、国際ビジネス学科、電子情報工学科、物質化学工学科と女子学生が比較的多い学科もあるということで、女性教職員も多いわけです。これは機構全体が女性教職員を採用する方針を立てていますので、このために、できるだけ女性教職員を採用するような公募条件をつけています。

２つの高専が１つの学校になったスケールメリットを生かした人事も心がけています。学科間あるいはキャンパス間の人員の枠を少し広くとらえて人事を行っています。

人事交流ですけれども、51国立高専があります。高専と深い連携関係にある技術科学大学が長岡と豊橋にありますが、高専間あるいは高専と技術科学大学間の人事交流にも積極的に参加する姿勢でいます。

教職員の資質向上の励みになればということもありまして、表彰制度を昨年度から設け、優秀な教職員を表彰しています。昨年度が第１回目ですが、その表彰を今年度に入って先般行いました。

女性教職員の採用に心がけていると言いましたが、昨年度、女性教職員のための環境整備促進ワーキンググループを設置しまして、実施可能なものから順次実施するような取り組みを提案していただいています。いずれにしましても、優れた教員の確保は大変重要な課題ととらえています。

長岡技術大学との連携に関連して、本校には商船学科、国際ビジネス学科と、いわゆる通常の工学系、技術系とは異なる学科がありますが、これが大学３年編入、これも重要な選択肢の一つになるわけですけれども、これを促進させるために、両技科大と検討して、商船学科､国際ビジネス学科の卒業生が大学３年に編入する道を開く検討も行っています。

私からは以上です。

【遠藤議長】　ありがとうございました。

引き続き、「（４）教育の質の向上及び改善のためのシステム」について、成瀬先生、よろしくお願いいたします。

【成瀬副校長】　4/12ページ、（４）教育の質の向上及び改善のためのシステムをご覧ください。

①　は、カリキュラムを着実に実施するということですが、特に新カリキュラムの中で、１年生の工学実験ですが、通常は入学した学科についての実験をするのですけれども、１年生の最初の段階では、いろいろな学科の実験を体験させたいということで、工学系、商船系、人文ビジネス系の実験、演習をローテーションで体験するというカリキュラムがあります。今年度も、この実施方法についてきちんと改善をしながら継続していきたいと考えています。これは先ほど言いましたモデルコアカリキュラムとの位置づけとも関係してくるかと思います。

5/12ページの③は、学校の枠を超えて学生の交流活動をするということでありますが、昨年度から幾つかプロジェクトを実施しています。まずは日本海側の高専が協力してアジアの学生の短期留学を受け入れるというプログラムを実施していますが、今年度もそれを引き続き実施していきます。特に昨年度はタイのキングモンクット工科大学からの受け入れを行っています。

高専機構の改革推進経費、高専機構の助成金とですが、２つのプログラムを実施しています。１つは「ロードマッププロジェクト」という国際的に活躍できるような技術者を育成する事業で、もう１つは、「SHOSENプロジェクト」で商船学科を中心に、５商船が学校の枠を超えてハワイのカウアイコミュニティカレッジとの交流事業を今年度も進めていきたいと思っています。

⑥のインターンシップについてですが、本校の場合は、国内のインターンシップと海外のインターンシップの２つあります。国内のインターンシップは、主に４年生の学生が県内外の企業にインターンシップとして就労体験させていただくと。海外のインターンシッ

プは、主に専攻科生を中心に体験させています。これも積極的に推進していきたいと思っています。

6/12ページの⑧ですが、技科大との有機的な連携強化で学生の教育課程、研究を進めていく事業で、これはスタートして既に３年目になります。長岡技科大との連携によるアドバンスドコースという事業で、本校で英語の力をつける授業を継続的に実施するほか、今年度、長岡技科大で行う授業を受けに行くことによって長岡技科大との連携強化を進めています。

以上です。

【遠藤議長】　ありがとうございました。

それでは、「（５）学生支援・生活支援等」「（６）教育環境の整備・活用」の２つの項目について丁子先生からお願いします。

【丁子副校長】　6/12ページの「（５）学生支援・生活支援等」ですけれども、実施状況のところは順不同に書いてありますが、基本的に問題になっていますのは学生のメンタルヘルス、体の障害と、もう１つ、最近いろいろと教育が難しくなっています発達障害の対策を行ってまいりました。

本郷キャンパスでは「ＫＯＳＥＮ　Ｃａｆｅ」、射水キャンパスでは「何でも相談室」ということで、学生の小さなメンタルヘルスの不調に早く気づいて対応していくという試みでやっています。

体の障害ばかりでなくて、発達障害に関しては特別支援教育室という組織を新たに立ち上げて、対応しなければいけない学生に対して一つ一つチームを作っていくという対策も行っています。

⑤は、学生が日頃思っていることを校長が直接聞く機会として、４、５年生の上級生や専攻科生との懇談会を設けて、なるべく学生の意見を聞くことにしています。

7/12ページの②は、図書館の充実についても、できるだけ学生の意見を聞こうということで、ブックハンティングも取り上げています。

授業料の減免制度その他は、通常、今までやってきたものを継続して実施しています。

進路指導に関しては、経済状況があまり芳しくないにもかかわらず、高専卒業生は100％就職が行われていますけれども、その内容はどうかと考えるとなかなか難しいところがありますので、本校ではキャリア教育にも力を入れており、インターンシップの推進や企業研究会を通して、いろんな企業の方に来ていただきキャリアガイダンスや講演会を実施し

ています。

次に「（６）教育環境の整備・活用」ですが、旧工業高専と商船高専の２校が高度化再編したことで、学科の再編などいろいろありました。それに伴い施設整備を５カ年計画で行っており、今はその中間期であり、計画に基づいて施設整備を着実に行っているところです。

法人化後、安全衛生委員会を設置して、学内の安全性の確保に目配りをしました。そこで気づいたことは、例えば転落防止用の手すりを付けるなどのバリアフリー化など施設的な整備も順次行っています。

8/12ページの②ですが、安全面について、昨年度の東日本大震災を教訓にするまでもなく、耐震構造の改修がここ数年行われてきたところですが、昨年度より電力不足もありまして、省エネや節電に関しては新たな思いで対策をとっています。

これは震災の関係によらず、数年前から「エコアクション21」の認証・登録を、元の工業高専時代から続けていますけれども、昨年度より両キャンパスが一致して校長のもと活動するというエコアクション21の認証の手続もとっています。パンフレットが資料の中にあると思いますので、後ほどご覧下さい。

また、先ほど学生の件を申し上げましたが、産業医等による面談も含めて教職員のメンタルヘルスチェックなどにも力を入れています。特に昨年度は、定期健康診断のほかに心の健康診断として、ストレスシートによるメンタルヘルスチェックも実施しています。

そのほか、毒物・劇物等薬品の取り扱い、化学系の学科以外でも取り扱っています。引き続きそういった危険の原因となるものを管理する体制も整えています。

【遠藤議長】　ありがとうございました。

教育関係に関する事項についてご説明をいただきました。

大きな流れを拝聴して、年度計画の今年24年度の分については、23年度から継続の課題が多くあります。新規のものとして強調しておきたい事項や、23年度を踏まえて24年度で新たに強調しておきたい事項はありますか。

【米田校長】　24年度計画の事項の末尾に「(継続)」と書いてあるのがほとんどで、23年度の実施を踏まえてそれらを継続して実施していきます。

ただ、一番申し上げたいことは、24年度の併願制の学力入試の課題が多々ありますので、その課題を踏まえた上でさらにこれを進めたいと思います。１つは入試ミスがあってはいけないこと、さらに志願者を増やして行くことです。志願者を増やすといいますか、入学

者を確保するために合否判定の読みがあるわけですけれども、その読みをできるだけ正確なものにしたい。この課題に取り組むということが１つあります。

【遠藤議長】　それはかなり大きな話題なのでしょうか。

【米田校長】　入試の方法はいくつかありまして、大学もそうですけれども、例えば工業高校卒業予定者に受けていただく編入学入試、それから専攻科の入試が推薦によるものと学力によるものがあります。どんな規模の小さな入試であっても間違いがあってはいけないので、そのためのミス防止はさらに強化したいと考えています。

【遠藤議長】　分かりました。

それでは、各項目ごとに委員の皆様方からのコメントあるいはご意見等々をいただきたいと存じます。

最初、「入学者の確保」ということで入試が絡むと思いますが、高田先生からご意見を伺います。

【高田委員】　まず１つ質問してもよろしいでしょうか。

今年度から、本郷キャンパスは併願が可能になったということで、従来、恐らく私立を滑り止めで受けていた生徒の中で、高専を滑り止めという形で併願してきている生徒も多いのかなと思います。

そうすると、今年度入学した学生の中で、目的意識の違いなどからこれは例年とは違うぞとか、そうした違いが何かあるのか。まずそのような違いを教えていただければと思います。

【米田校長】　ご質問いただいたことは我々も認識をしていまして、併願制の入試で今度入学した学生の高専で勉学するモチベーションがどうなのか、滑り止めで入って今どのような意識でいるのか、その辺の意識調査を行って分析したいと考えています。

【本江教務主事】　全体の調査結果はまだ出ていませんが、一部の調査結果から、併願になったから意識が変わったという比率は結構少ないです。

併願という形で県立高校を受けるチャンスは確かにあるのですが、もともと高専に来たかった学生の比率は併願制で若干減りますが、大きく変化があったというところまではありません。ただ、まだそれは一部の調査結果ですので、今後調べてきちんと対応したいと思います。

【高田委員】　ありがとうございました。

本当に年々改善していただいているものですから、中学校現場からは、要望といいます

かそうした点は私のところへは届いていないので、むしろ併願になって本当にありがたいという感謝の言葉も出ているのが実態です。ですから、今のところ、中学校長会として大きな問題意識は持っていないのが現状です。

年々改善していただいて、その中で贅沢な悩みを言うとすれば、保護者、生徒の立場から言いますと、これは難しいことだと思うのですが、１つは、不合格の場合に書面で確実に保護者あるいは生徒に伝える方法が、ちょっと今あやふやになっているのかなということです。

また、結果発表と県立の出願とが同日になっています。そうすると、県立高校を受験しようと考えている生徒あるいは複数の県立高等学校の願書を考えている子どもたちにとって、出願準備がやや煩雑になっています。これは本当に贅沢な悩みではありますが、こういうことをこの場で言っていいのか分からないのですが、あえて言うならばということでご了解願いたいと思います。

本当にありがとうございます。

【遠藤議長】　どうもありがとうございます。

米田先生、コメントありますか。

【米田校長】　確かに合格通知があやふや、それは２次合格を念頭に置いているので、あやふやと言えばあやふやです。

出願準備が少し煩雑というのも、合否の発表のタイミングと出願の締め切りのタイミングを見てやるので、ちょっと慌ただしいところは出てくるかと思いますが、できるだけ悩みが小さくなる方向で日程等は考えたいと思います。

【遠藤議長】　中学校としては、非常に改善が見られるということをおっしゃっていただけたと存じます。

併願制については、今年から併願制になったゆえの学生の意識の違いあるいはアクティビティーの変化に関してのフォローをされるということだと思いますが、いかかですか。

【米田校長】　計画に入れています。

【遠藤議長】　今年からもう準備に入っているということで、23年度からもいろんな計画ができているようですので、今年から真のデータが出てくるということで、ご検討いただきたいと思います。

続きまして、「（２）教育課程の編成等」について、木下様からいかがでしょうか。

【木下委員】　私も県立学校、高等学校特別支援などを預かっている立場で、この資料を

見せていただいて、逆に勉強させていただいているなと思っています。

③の英語については、本年度から私ども、新学習指導要領が来年からということになりますし、国からグローバル人材育成推進事業を全都道府県でやることにしていまして、本県からも４校が参加しています。これは、英語教育を改善して世界に通用する人材を育てていこうということで、内容としましては、例えば英語で英語を教える。そのためのいろいろな教材の開発及び先生方の研修、この研修は大体５カ年ほどで中高の全英語教員に受けていただく形にしています。

それとともに、中学校４校のほかに協力校を数校用意していまして、外部テストを、ＴＯＥＩＣになるのかＴＯＥＦＬになるのかまだあれですけれども、実施する形にしています。これで成果を見ていこうということで、私どもも、今年から始まったばかりなので、どういう成果が上がるのか、今後順次広げていくことを考えているようであります。

担当指導主事にいろいろ聞いていますと、必ずしも英語で授業していなかった英語教員が少しいるようでありまして、これは今後とも研修をしていかなければいけないと思っています。

私見ではありますけれども、こうした活動を広げる際に、授業の中でペアワークやグループワークなど、生徒たちにどんどん話す活動を取り入れさせていくこと。そのような教育指導の方法なども取り入れていきたいと思っています。

大学などでは、屋根瓦方式という生徒同士が切磋琢磨するやり方がありますよね。東京医科歯科大学の歯学部は、６年生が４年生を教えると。これによって国家試験を突破していくと。教える側の方が伸びるのだそうで、学力を上げるにはゼミや講義形式よりもはるかにいいということで、教育課程の中に既に位置づけていらっしゃいますけれども、高校ではなかなかそこまでできませんので、授業の中でとか地域の中学校へ出ていって教えるといった活動も含めて学力の向上を図っていきたいと考えているところです。

いずれにしましても、学力向上は高校側でも大変大きな課題でありますので、取り組んでいきたいと思っていますし、参考にさせていただきたいと思っているところです。

以上です。

【遠藤議長】　この点に関して高専側はよろしいですか。

【成瀬副校長】　今お話しいただきましたことを参考にさせていただきたいと思います。

英語で英語の授業をすることもありますし、高専の場合ですと、例えば専門の科目等を少なくとも英語の教科書を使って行うことを心がけています。

最近、短期留学の制度を利用しまして、タイやシンガポールの学生を短期留学で受け入れ、彼らは英語がベースになりますので、そういう学生を本校の学生と一緒に学習、活動させることを始めています。これは非常にいい効果を及ぼしていると聞いていまして、学生同士が英語でディスカッションすると、どんどんとまではいかないですが、我々教員よりも普通に入っていける感じを印象として持っています。

そういうことを今後も我々としてはやっていきたいと思いますが、今先生おっしゃいましたように､ペアワークや上級生が下級生を教えることは非常に大事なことかと思います。今後の参考にさせていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

【遠藤議長】　時間の関係もありますので、各項目ごとに先にご意見をいただいていこうと思います。

「（３）優れた教員の確保」について、石塚先生、いかがでしょうか。

【石塚委員】　資料を、見させてもらったのですけれども、非常によくできています。

１つは、数値目標が75％とか87％というのがありますけれども、ほとんど達成しているんですよね。

【米田校長】　達成しています。

【石塚委員】　教員採用には公募を採用されていますが、ガチンコ公募の場合、かならずしも良い人が受けに来ないというのが富山県立大学の実情です。ほかの学校を落ちた人が受けたりして。良い先生を集めるのは、たとえ、公募であっても、実際には、目星い人を見つけておくというのも重要かと思います。もっとも、何をもって良い先生というのかは問題ですが。

高専の場合、博士を多く採用する趣旨はよく理解できますが、たとえば、高専の卒業生に期待されているものとして設計力があります。そのための設計ができる教員の採用を考えると、博士の学位を持っていない人が多いのが現状です。よって、技術士の資格を持った教員の採用などは大変良いと思いました。教員の多様性を感じました。

以上です。

【遠藤議長】　さらにいい教員をどう集めればいいのかという視点でのご発言だったと存じます。数値がクリアされていることはすばらしいと思います。

【米田校長】　今先生がおっしゃったように、博士は基本的な資格という認識を持っていまして、やはり研究するモチベーションと力を教員が持っていないと、卒研生を指導した

り専攻科で特別研究を指導したりするときにやはり問題になってくる。

専攻科に関しては、課程認定という作業を経て認定を受けているわけですが、その担当予定の先生方に対して認定するのは主に大学の先生方なのですけれども、やはり研究論文の数、査読付論文の数が少ないという現状があります。

【石塚委員】　教授というのは実際的にはもうマスト。

【米田校長】　マスト。

【石塚委員】　博士は大体マスト。

【米田校長】　教授だけではありません。高専の場合には、准教授、助教の先生も卒研を見たり専攻科の学生指導をしますので、そういう場合に、研究論文の数が少ないため、積み増しを望みますというコメントがつくんですね。そうすると、専攻科そのものの存立の危機になりますので、そういう意味では基礎的な資格として博士の学位が必要ということになる。

また、高専の特徴が今おっしゃったような技術設計指導ですので、技術士であったり、同等の資格も当然考慮しています。中には、博士はないけれども技術士の資格で教授にということもあり得ます。ただ、数字目標の率はクリアしています。

【遠藤議長】　大学も含めて、教育機関としての共通の課題だろうとは思っていますが、理工系ではいろいろな可能性があります。今、大学においては新しい形で、ポスドクのポジションにテニュアトラック制度などを取り込んで、テニュアの教員として、ドクターコースを持っていて、かつ研究中心で業績が高くて、それに20％ぐらいのパーセントで教育ができる､教育の現場にも出る教員の養成が始まっています｡その人達は任期が５年です。教員全体の30％ぐらいを目途に将来は正規の准教授等で採用していくという計画です。これからは人材採用の機会はいろいろ広がる可能性があると思います。

【米田校長】　先ほどもちょっと申し上げましたが、独立高専機構の方針として女性教員を増やしましょうと。これは数値目標を１つ掲げていまして、これから高専で教員を採用する際には、女性の比率を20％、５人に１人は女性ということです。

【遠藤議長】　大学も一緒です。

【米田校長】　それを早期に達成するようにしましょうと、男女共同参画戦略の行動計画でうたっているんですよね。

先生おっしゃるようなシステムの中に、女性の比率というか、結構いらっしゃるものですか。

【遠藤議長】　それに関しての正確な数字は分かりません。

【米田校長】　もし機会を作っていただけるのであれば、高専の先生というのはこういう仕事をするポスト、職ですということを、ドクターコースに在籍しておられる女性の方に説明する機会がないかなと。全くの思いつきで恐縮ですけれども。

【遠藤議長】　それは各大学共有に。

【米田校長】　そうですね。

【遠藤議長】　富山県立大学では女性教員の割合はどうですか。

【石塚委員】　各学科１人か２人。

【遠藤議長】　少ないんですか。

【石塚委員】　ただ、私から見ると逆差別が行われていて、去年、ある私の知っている人が農工大のドクターを出たのですけれども、長野高専にほかの知っている人も応募したのですけれども、実績とかを見ると、どうも女性という理由で優先されたのではないかと。まあそれはそこの事情でしょうから。

【遠藤議長】　ただ、去年も申し上げましたけれども、高専のシステムは全国統一の独立行政法人システムという大きな特長を持っています。その点では、このような高専のシステムで一気に動く強さは今の国立大学の比ではないですね。

【石塚委員】　今のまま行ったら、かなりのパーセンテージ、上がると思いますよ。

【遠藤議長】　上がります。目標値の決定の仕方が画一的かつ強力ですよね。

高専というのはそういう意味でのシステムは非常にできていて、発展を作り上げやすい組織だと思います。

続きまして、「（４）教育の質の向上及び改善のためのシステム」について、これも石塚先生からお願いします。

【石塚委員】　これはよくできています。科技大との連携は大変良いと思います。そして、一番興味があるのは、いまやられている海外インターンシップです。中身はよく知らないのですが、これは充実されたらよいと思います。充実とは、今のインターンシップの中身と地域の拡大です。どこでやるとかの。

もう１つは、これは質問なのですけれども、技科大は長岡と豊橋と２つありますね。連携するときギブアンドテイクは成り立つのですか。どっちかがギブギブやテイクテイクではなくてお互いが、あらゆる分野でギブアンドテイクが成り立っているのですか。

【米田校長】　すべての関係はギブアンドテイクだと思います。テイクの量がどうかとい

う比率はあるかもしれませんが。

こういう表現が合うのかどうか分かりませんが、技科大は高専頼みのようなところがあります。3年次編入してくるそのソースは高専です。高専から技科大に行かなくなったら、技科大にとっては大変なことだろうと思います。

一方、高専にとっても、大学の中で連携相手として一番強い関係にあるのが技科大であることは間違いがないので、そういう意味ではギブアンドテイクでありアドバンスドコースの話も先ほど出ましたけれども、それは高専にとってもありがたい制度で、技科大にとっては必須の制度だと思います。

【石塚委員】　要するに、技科大は２つしかありませんが、高専はいっぱいありますよね。

【米田校長】　はい。国立だけで51あります。

【石塚委員】　つまり、富山高専だけにいっぱい特に目を向けてくれればやりやすいかもしれませんが、比較的地域が近いから有利ですか。そういうことは全然なく。

【米田校長】　今アドバンスドコース制度を試行的に技科大と近隣高専でやっていますが、試験的にやっている過程ではモデル校に指定をしていただいている。これは地域的に近いこともあるかと思います。

【石塚委員】　では、いいですね。

【遠藤議長】　海外インターンシップも高専のすごい強みだろうと思います。これに関しては予算立てはどんな形で、どのぐらいあるのでしょうか。

【米田校長】　幾つかのカテゴリーがありまして、機構側の協力してくれる企業のお金で、海外インターンシップに参加したい学生を募って審査して派遣する。それはその会社持ちになります。

それ以外にも海外インターンシップはたくさんあります。本校も独自でやっています。それは保護者の負担で行く場合もあるし、交流協定を相手先と結んでいると、その協定に従って滞在費は向こう持ちとか、お金の方はまちまちといいますかそれぞれですね。

【遠藤議長】　海外インターンシップ用に幾ら、学生何人当たり幾らと、最初から本部というか機構の方で持つということはありますか。

【米田校長】　ありません。

【遠藤議長】　ない。せめて高専がどれぐらいそういうことに力を入れて予算計画とかの中に盛り込んであればいいですね。

【米田校長】　国立高専機構としては柱を何本か持っていまして、１本の柱はグローバル

人材の育成ということで、海外インターンシップを大いに、直接計画を立てることもありますし、各高専が計画を立てやすいように、包括的な連携協定を機構が結ぶから、その協定のもとで各高専がどうぞやって下さいというやり方も含めて機構は推進しています。どこが費用を持つかということに関してはケースバイケースになります。

【遠藤議長】　分かりました。ありがとうございました。

次は、「（５）学生支援・生活支援等」並びに「（６）教育環境の整備・活用」になるのですが、今日は松田委員が体調を崩されて急にご欠席ということですから、ここはちょっと置いておきまして、「教育環境の整備・活用」について松坂様からコメントいただけますでしょうか。

【松坂委員】　ワーキンググループやタスクフォースでいろいろ計画されたこと、約10項目あったようですけれども、８項目が実施されたということで、大変いい成績ではないかと思います。

さらに、残りの２項目についても、留学生の習慣の違いによる浴室の改装というところが多分これからやろうとすることに含まれているのではないかと思いますので、やられたことについては大変よかったと思います。

どうも見ていますと、経年劣化のものをいろいろ直されたことが多いので、これからもそういうことが事故の原因になったりしないように頑張ってやっていただきたいと思います。

以前も申し上げましたけれども、施設とかそういうものについては、私ども外からなかなか把握することができませんので、物事をするときに、過不足がないようにいろいろきちっと決めてやっていただければよろしいのではないかと思います。

次のところでは、以前から出ていましたエコアクション21がいよいよ今年11月から両キャンパスが一緒になって受けられるということは、私がここへ参加するときからの課題で、いよいよそうなったかと、うれしい感じを受けています。

省エネに関することを一生懸命やろうということも出てまいりますので、今の時流に沿ったことだと思っています。

いつも出てきます健康、先生も学生も含めてですけれども、昨今言われていますメンタルヘルスも含めて、ここに大変大きな枠をとってやっておられます。対策があり実施がありますけれども、手間がかかることで、これは物を直すとかどうこうするということではなくて、学校のある限り永遠に続くことですので、面倒で大変な課題だと思いますけれど

も、頑張ってやっていただきたいなと思っています。

以上です。

【遠藤議長】　ありがとうございました。

今、松坂様からコメントがありましたけれども、学生支援・生活支援等について、委員の方々、何かコメントはありますか。

【木下委員】　私どもも高等学校へ入ってきますと、メンタルヘルスの問題とか発達障害の問題とかいろいろあります。

昨年度、発達障害については、私ども特別支援員を２名配置しまして、６校ほど回って授業サポートをしていただいたと。例えば教員への指導も含めてしていただいたのですが、特に分かってきましたのは、例えば視覚障害のお子さんは、授業でここのページを見なさいと言われても、どこを見ていいのかよく分からない。パニックになる。それでついていけないと。中学までは何らかのサポートがあったのでしょうけれども、高校へ入るとそういうものがないものですから、授業の中にサポート支援員の人が入り、ここですよと指していろいろ教えることで学習意欲が増して、不登校から立ち直ったお子さんが何人かいらっしゃいました。

当然、発達障害のお子さんは２次障害をお持ちですので、そういうお子さんなどの支援も特別支援員の方にしていただきました。

県内の小中学校では、そういう支援員の人がもう既に二百数十名入っていただいていまして、非常に成果を上げておられます。毎年どんどん市町村の方で配置しているようですが、多分今後、高等学校の中でも、あまり私どもも考えてこなかったのですが、そのような辛い思いをして、だれかの支援があれば伸びていく生徒にどのように支援するかということが課題になってくるかと思っています。

また、メンタルサポートも含めてですけれども、ピアサポートについて何年か前から取り組んでいる学校もありまして、大学ではお茶の水大学で、入学すると上級生が下級生をサポートするという制度があります。県内では、泊高校、八尾高校がホームルーム単位で生徒同士が生徒を支え合うという、これはたしか富山大学人間発達科学部の先生のご指導のもとでやっているわけですけれども、そうした活動をしたところ、１年間で不登校、いじめが激減したという成果も出ています。

多分いろいろな形でお取り組みだと思っていますので、また参考にしていただければありがたいと思っています。

【遠藤議長】　ありがとうございました。

一応この教育の話題、大体今コメント等を含めていただきました。

最後に、まとめといいますか、委員の方のご意見あるいは学校側のご意見がありましたらお願いします。

（発言する者なし）

【遠藤議長】　よろしいですか。

時間の都合もあります。到達目標はそれぞれしっかりやられていて、その中での新たによりプラス、さらに進めるためのご意見もいただけたと思います。更なる発展を期待いたします。

続きまして、「２　研究に関する事項」に入りたいと存じます。これは丁子先生からご説明をお願いします。

【丁子副校長】　8/12ページの一番下の欄、「研究に関する事項」です。

先ほど校長の話にもありましたように、当然、教育の基盤をなすのは研究する力、研究力も重要だということで、研究にも力を入れています。

研究の活性化を図る方法として、いろいろと工夫をしていますが、基本的に論文発表や学会発表したりすることが必要だと。あるいは、英文で論文を書かないといけないと。どうしてもこれは費用のかかることですので、できるだけ費用がなくてできないということがないように、そういった面のサポートをする。そのことによって研究実績が上がってくれば外部資金も取ってきやすくなるということで、いい連鎖を図ろうと努力しています。その成果も徐々に上がってきたかなというところです。

１人で研究しているとなかなか成果が上がらなくても、何人かチームを組んでやることも効果的であろうということで、チーム育成という事業もやってきています。

また、それの拡大版ということで、産業界と一緒にグリーンイノベーション研究会というものを立ち上げ、これも成果を上げようということで取り組んでいるところです。

研究費に関しては後ほどまた校長から説明があるかと思いますけれども、ちなみに、資料２の44ページに科研費の採択状況のデータを記載しています。外部資金の代表的なものですけれども、少しずつ成果が上がってきています。今年度は、全国高専では２番目に採択件数並びに金額が多いということで、各教員の地道な努力の結果ではないかと思っています。

地域連携のもとで、いろんな外部資金もあります。自治体としては黒部市、射水市と包

括協定を結び、いろんな連携事業を展開しようということで、それも徐々に成果が上がっています。

富山市では環境未来都市という事業もやっており、そこに本校教員も何人か協力しています。まだ研究というものに結びついていないようですけれども、連携で発展させていければと思っています。将来的には、富山市とも連携、協定を結ぶというところに持っていきたいと考えています。

また、先ほどもちょっと話題に出ましたけれども、技科大との連携です。学生を送り込むばかりではなくて、技科大と教育研究の連携をすることにも力を入れています。

研究に関することは以上です。

【遠藤議長】　ありがとうございました。

これに関して金岡様からコメントいかがでしょうか。

【金岡委員】　研究に関する事項というテーマは少し苦手でありまして、話題は違うのですが、重要なテーマの一つであります「入学者の確保」というところに逆に話題を持っていこうと思っています。率直に感じたことを申し上げますと、まず最初に、高専51校の共通した中期計画が載っているわけですね。ここに実質競争倍率1.5倍以上を確保すること。私、これは大変大きな目標だと思います。私は学校の経営について格別素養がありませんけれども、この数字は全体で１万8,500人という数字が根っこにあるのだろうと思うのですけれども、1.5倍というのは大変高い数値目標です。特に今どの学校も苦戦しておられるところで大変高い。

それで、年度計画実施状況という平成23年の資料をいただきまして、電卓を持ってきていないので私ちょっと計算してみたら、計算違いかもしれませんけれども、商船系は24年度の実質競争倍率は1.8倍ぐらい、本郷のキャンパスは1.6倍ぐらいと大変高い。

中身はここに書いてありますように、試験のときの併願制だとか、対策本部を作られたとか、幾つか要因がありますが、今年度から志願者の数が急激に増えて、これはすばらしい。少子化が進んでいる日本の国において、こういった高い実質競争倍率はとてもキープできない。ところが、高専の場合は、今私が言いましたように1.6倍と1.8倍ですから、これだけ上がったものを必然的にキープするだけの施策と努力とやり方がないとできない。これはたまたま上がったでは困るのだろうと思います。

苦言ではありません。ここに対策本部など、いろいろ書いてありますが、パンフレットを作っても全然だめです。パンフレットに基本方針だとか現状だとか成果だとか書いてあ

りますけれども、こんなものは誰も見ません。どこの学校も同じようなものを作るからです。

この高専はどこが違うか。アイデンティティーみたいなものかもしれません。成果で言えば、どこが優れているかということかもしれません。何かないと。私はビジネスマンだからこういうことを言うのですが、パンフレットというのは効果がない。

そうすると、中学校を訪問されて口でしゃべるのが一番。口というのは、パンフレットの中から自分で恣意的、効率的に選択して言うことができる。今どこの学校も標準化してしまっている中においては、パンフレットを見ても効果がない。まずは志願者の数だということでしょう。実質競争倍率。もちろん、この次に入学率だとかいろんなファクターがあります。

いただいた資料を見ていましたら、定員と志願者数と合格者数と入学者の４つだけファクターの数字があるわけです。その後絡まっていろんなあれが出てきますけれども、一番根っこは定員ではなくて志願者の数がこの計画では設定されているわけです。

そうすると、どうやって志願者を増やすかということについては、中学校を訪問する。それでもってこの高専を受験してほしいのだと。どういうやり方をされるか分かりませんが、どこかに訪問してという言葉があったと思いますが、パンフレットを作りましても志願者は増えない。

たまたま実質競争倍率がはね上がったところでこのデータをもらいましたから、これを来年度もキープできるかどうか。そのためにどのような努力をされるのか。黙っていれば、少子化でどんどんこの数字は落ちていくわけです。この高専51校が立てました１万8,500人という数字も、ベースから言うと、中学校の卒業生の数はどんどん減ってきますし、この数字は下がっていく。上がった数字をよく分析して、多分併願制云々というところが多かったのだろうと思いますけれども、それはそれとして、この実績を次年度、次々年度もどうやってキープしていくかというところは学校の努力によるものであろうと思います。これは努力した場合と努力していない場合では、明確に差が出てくるのではないかと思います。

私は富山第一銀行奨学財団の理事長ということで参加させていただいておるようでありますから、来年度もっと研究助成費を増やしましょうと言えばそれで済むことなのですが、これはまた全然別な次元のことでありますから、銀行員らしく、ぱっと一番最初に入学定員のところとか、こんなことを言ったら非常に角が立つから聞かなかったことにして

いただきたいのですが、銀行がお取引願っている学園というのはあるわけです。国立とか県立とか独立行政法人ではないようなところの、これはいつも天王山は志願者ですね。これがだんだん減っていって、これはどのようにしたらいいのだろうかということなのだろうと思います。いろんなところがそれぞれ苦労しておられる。

大学だとか、高専でなくても高等学校も同じようなものでありますし、いただいた資料は、私は最初の方だけ見るくせがありますから、最初の方をぱっと見ましたら「年度別・学科別入学者選抜実施状況」というのが出てきましたから、いい数字だけ見せてもらって大変喜んでおりますが、これをこれからどのような形でキープするかが重要です。

もうやめますけども、第２期中期計画の中で23年度までのものがいろいろ、実施済みの数字を伺い、24年についてはいろんな計画を見せていただきましたが、難しい項目ばかり並んでいますけれども、その中で、先ほど言いましたように、実質競争倍率は御校は去年だけクリアされたと。おととし、さきおととしはだめであります。ちょっと計算してみたのですが、去年だけクリアされたということで、すばらしい状況にあるのだと。もちろん、どんな就職指導をされるかとか何だかんだとか、いろんなファクターも当然絡んで出てきているものだろうと思います。

そんなことで、研究費の話はちょっと勘弁いただきまして、冒頭の項目だけ、ぱっと見て感じたところです。

【遠藤議長】　貴重なご指摘であったと思うし事実だと思います。併願制はすごく大きなキーワードですし、最初に言われましたとおり、いかに評価して、かついい学生に入っていただくかだろうと思いますので、またよろしくお願いいたします。

【米田校長】　まずは、奨学財団の方でご支援をいただいていまして、ありがとうございます。

そちらでいただいた資金を活用して、先生方の研究力のアップにつなげたいと思います。

【金岡委員】　こういうのは即効性はないと思うのですが、私だったら、これは実際は無理なのだろうと思いますが、考え方だけから言いますと、高専を卒業された方が中学校の先生にたくさんついていただいて、その先生に高専へ行けと言ってもらうのが非常に教育とか何とかというのは非常にスケールが長い、短期的にどうのこうのというものではない。拙速のようですが、そういう形で回っていくのが一番正解のような気がします。これは現実は分かりませんけれども、考え方だけからすれば、オーソドックスに回っていくような、奇をてらってもいい方法は私はあまり思い浮かびませんけれども、非常にオーソドックス

な形で回っていく。

ですから、本学の卒業生も、県内の中学生からの希望者が多くて、なおかつ就職も富山県内が多いのだろうと思いますので、それは非常にいいサイクルですから、そういう中で、志願者がある程度キープされていくという形が一番オーソドックス。妙案ではないのですけれども、ピントが合っているのか合っていないのか分からないような話をして申しわけありませんでした。

【米田校長】　たまたま24年度はね上がった。これはおっしゃるように、併願制に統一したことが大きな要因であることは間違いないのですが、これを今度は落とさないように、ご指摘のとおりだと思います。中学校訪問２回を基本にして、バロメーターがありまして、オープンキャンパスにどれだけの中学生諸君あるいは保護者が来てくれるか。今度のオープンキャンパスは昨年に比べて、現時点ではそんなに減っていません。確かに去年ほどではないのですけれども、そこそこの数の参加者がいる予定になっています。

【高田委員】　中学校現場にかなりスポットが当たっているようなので。

昨年度から年２回、学校を訪問していただきまして、これはかなり効果があるなと実感しています。例えばそれを通して併願が可能になるとかそうした情報が手に入りまして、生徒との個人面談の折に、併願が可能になったことなどを保護者会、三者面談、12月等の折にそうしたことをお伝えしたり、あるいは３年生向けの全体保護者会でそうした併願可能になりましたという話もさせていただいていますので、いろいろなことが功を奏しているのではないかなと思います。

したがって、今年度も、各学校、３年生の担任はかなりかわるとは言うものの、そうしたお話をまたしていただければ、各学校でそれぞれ工夫して、併願可能になったことを保護者並びに子どもたちが理解してくれるのではないかなと思っています。

【遠藤議長】　ありがとうございました。

金岡様の意見は教育現場にいたら発想しないような、高専の卒業生を教員にして現場に送り込めというご意見でした。いろいろ難しいこともあると思いますけれども、そういうヒストリーを持った方が、中学校の少なくとも理数系とか理工系とか、あるいは専門系の教師になることは大切なことだと思います。ありがとうございました。また中学へのアプローチということでいろいろあろうと思いますが、よろしくお願いします。

続きまして、「３　社会との連携，国際交流等に関する事項」について、成瀬先生、お願いします。

【成瀬副校長】　9/12ページからですが、まず社会との連携ということで、特に高専の場合は、小中学生向けの公開講座、出前授業等々を積極的に実施しているところですけれども、今年度はそれを整理いたしまして、一種の一覧リストを作成しています。

それを今小学校、中学校に示させていただくということで、それを見ればすぐ、「あっ、自分がやりたいのはこれだな」とか、例えば小学校の方で保護者の方々からＰＴＡの活動でこういうのをやってほしいという問い合わせも今あるようです。そういう形で、一種のパッケージ化を今年度実施しているところです。

もう１点、10/12ページですけれども、国際交流の取り組みということで、一応本校は幾つかカテゴリーに分けまして実施しています。低学年向けで行きますと、語学研修ということで、中国、韓国、ロシア、オーストラリアに１カ月間の派遣をして語学研修をすることのほかに、半年、１年間の海外留学ということで、戻ってきても留年しないでそのまま進級できるという一種の異文化体験をベースにしたプログラムを持っています。

先ほども話に出ましたけれども、海外インターンシップについては、高学年、専攻科生を中心に現在幾つかプログラムが動いていまして、英国の北アイルランド、ハワイの２つのカレッジに毎年二十数名の学生が行っています。これは主に教育機関で勉強する形になりますが、今年度新たに、マレーシアに就労体験という形で、立山科学様のご協力を得ましてインターンシップを実施できることになりました。ご協力いただきましてありがとうございます。

３つ目は、短期留学の受け入れです。特に１カ月間から３カ月間学生を受け入れるということで、昨年度からシンガポールのカレッジの学生、タイのＫＭＩＴＬの学生、中国の大学の学生を短期で受け入れて、本校の学生と交流させて一緒に研究させることを取り組みとして行っています。

もう１つ、機構が主催しています国際シンポジウムに積極的に参加して、学生に英語で研究発表をさせる体験をさせています。昨年度も今年度もタイのキングモンクット工科大学を会場にして行うことになっていますが、そこでも積極的に専攻科生の英語での研究発表を実施しているところです。

以上です。

【遠藤議長】　ありがとうございました。

この点に関しまして、正橋様、今立山科学の話も出ましたけれども、一言お願いします。

【正橋委員】　今ご案内していただいてありがとうございます。

高専さんからお話がありまして、当社のマレーシアの会社に、高専の学生２名でしたかね、インターンシップという形で現地で受け入れさせていただくという話を今させていただいています。

今のお話にもありましたように、初めてのことなので、ご担当の方もマレーシアに行かれて、うちの社長とかと非常に密なセッティングをやっていると聞いています。

よく出てきます英語教育とあわせて、やはり現地での作業を見ていただくことが国際化、グローバル化という意味では非常に重要なことだと思っています。インターンシップというか、海外の各学校に行かれていることもありますけれども、就業体験はまた別だと思うので、そういったことをどんどん広げていただきたいと考えています。

これは前回もお話ししたかもしれませんが、こちらでの留学生の方の企業側でのインターンシップ、日本でのインターンシップも今動いていただいていまして、当社でも受け入れを考えているという状況があります。

企業の中でグローバル化、グローバル化という声だけが出るのですが、やはり地域で実際に留学生の方を抱えていらっしゃる学校と積極的にタイアップして受け入れていくことを企業側が進めていかないと、なかなか自分たちで海外に出ていくのも難しいのかなと思っており、高専さんの取り組みに関しては非常に感謝しているという状況です。

今回、その他のところでは、企業に対しての人材育成に取り組まれたと出ているのですけれども、１つ公開講座のところで企画が実現できなかったというお話が出ています。多分、高専さんが持っていらっしゃる技術という部分もあって、それが企業の教育の部分とマッチするようなところが見つけられるのであれば、いろんなテーマを出していただきたいなと思います。

いろんなところからいろんな講座の案内も来るのですが、我々にしてみると非常に近いところ、あるいは県内の企業にしてみれば、そういったところを活用して社員教育をやっていきたいという思いもあると思いますので、その辺のところをさらに充実していただければ、おもしろい結果になるのではないかなと思います。

以上です。

【遠藤議長】　ありがとうございました。

時間も押していますので、次のテーマも話して頂き、最後にまとめて皆さんのご意見をもう一度いただきたいと思います。

次に、「４　管理運営に関する事項」及び「５　その他」について、米田先生からご説

明をお願いします。

【米田校長】　本校での管理運営のシステムの概要についてお話をいたします。

本校の意思決定機関としては、運営審議会というのがありまして、定例月１回開催をしています。これには、各学科から学科長、センターからセンター長等が集まって、重要な事項について審議決定をしています。

これとは別に教員会議があり、全教員に月１回集まっていただいて、これは人数が多いものですから、キャンパスごとにということです。両キャンパス合わせての会議も年に１、２度やりますけれども、通常はキャンパスごとに、校長はじめ副校長、主事等から直接先生方に重要な決定について説明、報告をするという会議を行っています。

戦略的に物事をやる必要もあります。そのためには、本校の戦略として何が重要か、これも月に一度、戦略企画会議を開いて議論しています。

現在、たまたま少し高専に対して評価をいただいている部分もありますが、冒頭の挨拶で申し上げました次の50年を見据えて変化していく必要がある。そのときの方向性のようなものを、中堅クラスの教員で議論する企画提案ワーキンググループを立ち上げて、そこで将来にわたっての再編を含めた提案をしています。

最近、いろんな意味で、防災マニュアルや防災を含めた危機管理マニュアルの整備にも努めています。

それと、本会議ですけれども、運営諮問会議を開催しまして、外部有識者の皆様からご意見、アドバイス等をちょうだいしてＰＤＣＡサイクルを回していきたいと考えています。

以上です。

【遠藤議長】　ありがとうございました。

ほかの予算関係等々はよろしいですか。順調にサイクルが回られているように拝見させていただきますし、システムは、実際には２校に分かれていることでいろいろおありなのでしょうけれども、非常にうまく対応されていると感じます。

【米田校長】　大学では、全教員に学長先生なり学部長から直接お話をする機会というのはそう多くはないと思いますが。

【遠藤議長】　稀にしかないですね。

【米田校長】　評議会のような組織の代表が集まったところで、情報伝達はその逆ルートで、本校もそのルートを持っているわけですが、直に報告なり先生方に伝えるルートを持っているのが教員会議です。

【遠藤議長】　今の時代、それはより必要なのかもしれません。先日、国家公務員に準じた給与の削減を実施した際には、全学部に説明して回りました。予算の執行というのは、今、高専もそうでしょうけれども、国立大学はとても難しい状況にあって、腹立たしいことがいろいろ起こっていて辛いですね。

今年度どのようにお金が動くかということと、来年度以降、さらに国家予算がどう動くかによって、高専の体制もかなり影響をこうむる可能性はありますよね。その辺がちょっと心配ですけれども。

【米田校長】　今議長がおっしゃったことがあって、予算の執行を一部留保しています。臨機応変に対応しないと経営が成り立たない面が最近はありまして、特に今は復興財源のための給与削減措置があって、対応には苦慮していますが、何とか乗り切ろうと思っています。

【遠藤議長】　その点はどのように状況を読むのか、金岡様あたりからご意見がいろいろあろうと思うのですけれども、何か我々の国立組織系にしわ寄せが来ていると思います。逆らえないところからお金を取っていかれているような、地方自治体にも早く回して下さいと言ったらみんな反対して……。やめましょう。話を変えます。

１点だけ、組織という点で、この間高校野球で、偶然、本郷キャンパスの９回表か、９回裏か、最後の粘りのところをすばらしいなと思って拝見していたのですけれども、部活動は２つ一緒という方向ではないのですか。そしたらもうちょっと強いチームができるのではないかと思ったりしたのですけれども、いかがなものでしょうか。幾つかのチームは合同でやっていらっしゃると書いてありますけれども。

【米田校長】　２年半前に２つの高専が１つになったのは全国で４つありまして、富山高専以外は仙台高専と香川高専と熊本高専なのですが、当時、機構本部の方針としては、１つの学校になったということなので、体育大会であったりさまざまなイベントに対しては１つの学校としてチームを出す。これが本筋です。

ただ、実際２つのキャンパスが離れていまして、本校は仙台高専同様、キャンパス間の距離が比較的近い方です。これが香川高専ですと、高松と詫間と結構離れています。熊本高専も八代と熊本で離れています。そうしますと、なかなか１つのチームを出せと言われても難しい面があるということで、今は大会の主催者の求めに応じて、キャンパスからチームを出す場合と、１つの学校としてチームを出す場合とまちまちになっています。

体育大会の場合でも、種目によって合同チームで参加したり、各キャンパスからゼッケ

ンをつけて参加したり、ちょっとまちまちといいますか中途半端なところは実はあります。

私の考え方は、１つの学校だから１チームだろうと基本的には考えています。

【遠藤議長】　部活動のあり方はやはり重要ですよね。グローバル人材云々と言いますけれども、本質的に人と人とのつき合いをいかにやるかということにおいて、私は部活動に対する取り組みはもっと真剣に考えたいと思います。学生の部活動とかサークル活動がうまく行われる形というのはいろんなことで工夫し、考えなければいけないと思うわけです。

テレビを見ていたら、人数が少なくてチームが組めない、ぎりぎりでやっているという話も聞こえました。１校で試合に出られないのだったら２校一緒に合わせて出ればよいのではないでしょうか。難しいのでしょうか。

【米田校長】　高等教育機関の一つとしての高専ですけれども、いろんな特徴がある中で私が最大の特徴だと思っているのは、中学校を卒業した生徒を学生として受け入れて５年一貫教育をする、そこだと思うんですね。中学校を卒業した生徒を受け入れるという点では、大学以上に人間形成面が重要な役割を果たすだろうと思っています。そういう意味では、部活動も大事にしていきたい。

キャンパスごとに考えると、従来の４学科が３学科に学年進行で移行していきますので、今議長が指摘されたようなチームを組みにくくなっていくという現実は年々ひしひしと出てくるわけですけれども、それも何とか１つの学校としてのチームを出すなり、おのおののキャンパスから出すにしても工夫していきたい、そんなようなところです。

【遠藤議長】　分かりました。

大体これで23年度の事業の報告、24年度の計画全般についてお話をさせていただいたと存じます。

皆様方でぜひこれはというご意見がありましたら、いかがでしょうか。

【米田校長】　大きなⅡとⅢについて、大学もそうかと思いますが、運営費交付金には効率化係数が年々かかっておりまして、一般管理費は３％、その他経費で１％と厳しいものがあります。その分、外部資金を獲得するように努めてはいますけれども、年々厳しくなる予算の中で何とか工夫をしていかなければならない。

外部資金は先ほど研究面での報告もありました。科研費をはじめとして、外部から資金を獲得するための努力は惜しまずやっていきたいと思います。そんな中で、第一銀行奨学財団には今後ともよろしくお願いしたいと思います。

国際交流や海外インターンシップの話も大分していただきましたけれども、国際交流す

る際にはどうしても基金のようなものが必要で、それがないとなかなかスムーズにいかない面があります。

いろいろな意味で困窮度の大きな学生に対する支援もありまして、何とか基金を創設していきたいなと思っています。そのための準備に今年度は入ろう~~かな~~と思っています。

50周年、あるいは船の関係ですと110周年を近々迎えることになりますので、その辺でも少し、欲張りなことを考えていますけれども、基金などお願いしていくことになるのではないかと。

ちょっと余計なことになりましたけれども、追加で述べさせていただきました。

【遠藤議長】　資金あるいは予算関係について最後出ましたけれども、今、国家的に厳しいのかもしれません。正直言って、日本の国の教育に関するお金のかけ方は少な過ぎると思っています。

高専の皆様は研究成果を順調に上げていらっしゃって右肩上がりの数値が出ていましたけれども、日本の教育、高等教育、そしてその結果として出てくる研究成果に関しての研究論文は世界で唯一右肩下がり、毎年下がっています。日本だけ国立大学等が法人化したあたりから右肩下がりで、上がる傾向が全然見えず、ますます研究力が落ちている日本の国という形になってしまうことは大問題です。その打開が教育関係の共通の話題になると思います。

（２）その他

【遠藤議長】　もう時間も迫ってきましたが、ほかに追加のご発言がありましたらお願いしたいと存じます。

（発言する者なし）

【遠藤議長】　では、この後フリーのディスカッションの時間もあるようですので、23年度の成果、24年度につながる計画ということで、高専の努力はすばらしいなと皆さん共通に思っていただけているところだと存じますので、また今後とも御活躍を期待させていただきます。

これで、議事の部分は終わらせていただきたいと存じます。

４．閉会挨拶

【林事務部長】　長時間にわたりご審議いただき、まことにありがとうございました。

以上をもちまして、平成24年度第１回富山高等専門学校運営諮問会議を終了いたします。

閉会に当たりまして、米田校長からご挨拶申し上げます。

【米田校長】　長時間にわたりご議論いただきまして、ありがとうございました。

遠藤先生には議長をお務めいただきまして、ありがとうございました。

今日いただいたコメント、アドバイス、また冒頭申しましたように、本校も変化が必要です。そのために参考にさせていただきたいと思います。

お願いすることも多くて申しわけありませんでしたけれども、富山高専、これからも志願者をできるだけ減らさずに、研究面でも教育面でもできるだけいい方向にＰＤＣＡを回していきたいと考えていますので、今後ともどうぞよろしくご支援のほどお願いしたいと思います。

本日はありがとうございました。

〔閉会　午後０時０５分〕